

## ヒンズー教の思想がゲーテの輪廻観と

### 作品に与えた影響について

ツグラツゲン・エヴェリン

はじめに

現在、ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ（一七四九—一八三二）の輪廻観についての研究はまだ少ない状況である。ヘルムート・オプストの『輪廻——ある理念の世界史』（*Reinkarnation, Weltgeschichte einer Idee*, 2009）の第六部「ヨーロッパの精神生活の中心へ」で、ゲーテの輪廻についての考察が述べられている<sup>①</sup>。また、グロリア・コロンボは「ゲーテと輪廻」（Goethe und die Seelenwanderung, 2013）という論文の中で、ゲーテが読んだ輪廻に関する著書を紹介しており、その中には、ヒンズー教の輪廻思想に関する著書もある。またゲーテの手紙や会話、著作の中で現れている輪廻の概念についての解説もしている<sup>②</sup>。この二つの先行研究を踏まえ、「ゲーテにおける『生命哲学』の研究——自然詩文・永遠・輪廻・行為」という論文

で筆者は、ゲーテの青年期から最晩年までの輪廻に関する発言を集め、彼の輪廻概念が生涯にわたって様々な思想の研究と経験により、深まっていった過程を明らかにした<sup>③</sup>。とはいうものの、輪廻概念に基づいたゲーテ作品の解釈は依然少ない。グロリア・コロンボは「ゲーテと輪廻」の中で、輪廻を基にしたゲーテ作品の解釈について「詩人ゲーテの輪廻論についてのすべての発言、それらに関する研究は、ゲーテ作品の解釈に関する今まで埋もれてきた新しい貢献となるもので、ゲーテのそれらの発言は特別な傾聴に値する<sup>④</sup>」と述べている。ゲーテが関心を持った様々な輪廻を扱う作品の中に、ヒンズー教の聖典『バガヴァッド・ギーター』（以下『ギーター』と略する）と『アルジュナ、インドラの世界へ行く』（以下『アルジュナ』と略する）がある。本論文ではいまだ明らかにされていない、ヒンズー教の思想がゲーテの輪廻観と作品に与えた影響について論じる。

## 一 ゲーテとヒンズー教の思想

ゲーテの生きた時代は、古代インドの民族叙事詩『マハーバーラタ』やその第六巻に編入されている『ギーター』などの研究がドイツで始まったばかりの時代であった。<sup>(5)</sup>しかしゲーテはこの新しく誕生したインド学の発展を注視していた。彼が読んだヒンズー教に関する文献の中で特に輪廻と関係のある文献は『ギーター』と『アルジュナ』である。彼は『ギーター』をドイツ語とラテン語で数回にわたり読んだと考えられる（一七九二、一八〇八、一八一五、一八二四、一八二六年）。以下にその詳細を挙げる。まずヨハン・ゴットフリート・ヘルダーの *Gedanken einiger Brahmanen*（一七九二年、「いくつかの婆羅門の思考」という *Nachdichtungen*（替え歌）は『ギーター』からの三つの詩の詩句を改変したもので、ゲーテはこの作品を読んだと考えられる。またフリードリヒ・シュレーゲルの『インド人の言語と英知について』（*Über die Sprache und Weisheit der Indier*, 1808）の中に、「ゲーテは『ギーター』の部分的な独訳を見つけた。またゲーテが一八一五年に数か月間借りた *Asiatisches Magazin*（『アジアのマガジン』）の中に、フリードリヒ・マイエルの『ギーター』の第一章から第三章までの独訳があった。<sup>(7)</sup> また一八二四年ゲーテは、アウグスト・シュレーゲルから注釈付きの『ギーター』のラテン語訳をもらった。またヴィルヘルム・フォン・フンボルトの『ギーター』についての

二回の講義（*Ueber die unter dem Namen Bhagavad-Gita bekannte Episode des Maha-Bharata* 『ギーター』という名で知られている『マハーバーラタ』の物語について）一八二五、一八二六年）の複写をゲーテは手に入れ、この講義について一八二六年に秘書のフリードリヒ・ヴィルヘルム・リーマーと会話した。<sup>(9)</sup>

そしてゲーテはフランツ・ポップがサンスクリット語から独訳して、一八二四年に出版した『アルジュナ』（*Ardschuna's Reise zu Indra's Himmel, nebst anderen Episoden des Maha-Bharata* 直訳は『アルジュナのインドラの天界への旅行、と他のマハーバーラタの物語』）を持っており、かつオルフェルト・ダッペルの『アジア』とビエール・ソネラの『一七七四年より八一年にわたる東インドおよびシナへの旅』（以下『旅』と略す）とヘルダーの『人類歴史哲学考』も持っており、これらからヒンズー教について知見を得た。<sup>(11)</sup>

## 二 ゲーテとヒンズー教における輪廻観

ゲーテの著作を具に見ると、彼は青年期から最晩年まで輪廻の思想を絶えず持っていたことがわかる。青年期は、輪廻や靈魂に対する表現方法に未熟さがあったが、晩年にかけて、詩的な表現や哲学的用語を用い、次第に自身の輪廻や靈魂に対する思想を詳述するようになっていった。そのために彼は、例えばデーモン、モナド、エンテレヒー、靈魂、中核、エンテレヒー的モナド、精神、イデーなどの哲学的用語を用いた。<sup>(12)</sup> 彼の輪廻

観や靈魂概念に影響を与えた思想哲学は、プラトンのイデー、ライプニッツのモノイド論、アリストテレスのエンテレヒー、オルフェウス教など様々あるが、これらの西洋の靈魂概念には、靈魂が光を放つ、という考えはない。このような考えはヒンズー教のものであり、彼の晩年の作品に現れている。

一八一三年一月二十五日、ゲーテは友人のクリストフ・マルテイン・ヴィーラントの死をきつかけに、ヨハンネス・ダニエル・ファルクと輪廻について対話している。以下にその要点をまとめる。

対話の冒頭、ゲーテは「自然における全現象の出発点」である「根源構成要素」を「靈魂」または「モノイド」とよび、定義している。「モノイド」はドイツの哲学者ライプニッツの考案した概念である。ライプニッツは、肉体と魂の調和を求め、真に存在するものはモノイドという実体であると論じている。肉体や他の物体はモノイドの「延長」<sup>(13)</sup>であり「現象」にすぎない。対して靈魂は単一的な実体であると。この対話の中で、ゲーテは、人間の靈魂は、人間だけでなく世界や星として生まれ変わることもある、という宇宙規模の輪廻観について述べている。蟻から世界まですべてのものには靈魂、あるいはモノイドがあり、それらのものは、目に見えず内在している「高い意思、より高い使命」を持ちながら、同じ法則に従って目に見える形に発展していく、と述べている。そして人間は、自身の勤勉、熱心、精神により来世以降、世界モノイド、あるいは星として生まれる可

能性があるとの考えを示し、人間の靈魂は、自身の努力によって成長して、さらに大きな靈魂に生まれ変わることができる、とまとめている<sup>(14)</sup>。

またヒンズー教にも宇宙規模の輪廻観がある。鍍淳はヒンズー教の輪廻観について「いかなる個々の存在も、純粹に靈的な原理と、粗大並びに微細な物質の構成する肉体とから成っている。(省略)人が、物質からなる自らの肉体を、真に自己なりと思ひ込み、誤認して、これに執着し続けるかぎり、人は因果応報の定めに従って、前世から揺曳する善悪両業の效果を受け、絶えず、新たな生を繰り返し、輪廻し続ける」と述べている。ヴェーラスワミー・クリシュナラジュによれば、太陽、月、地球、インドラなどの神々への崇拜は、効果が限られており、インドラや他の下の神々の崇拜者たちは、世俗的な恩恵を享受してスヴァルガに行く。最高の世界であるクリシュナの世界に比べて、スヴァルガは低い世界である。彼らは一時的な住人としてインドラの世界に行き、一定の期間後、生々流転(サンサーラ・輪廻)<sup>(16)</sup>に入る。『ギーター』第八章にあるように、魂は下の世界から梵天の世界にいたるまでの諸世界を回帰するが、クリシュナの世界に到達すれば以後は回帰しない<sup>(17)</sup>。以上のようにヒンズー教の最終的な目標は、「輪廻の輪から抜け出す」とである。

しかし、ゲーテは『アルジュナ』、『ギーター』と出会う前からすでに、靈魂またはモノイドは、世界や星になれる、という輪

廻観を持っていたが、彼の作品や発言などからは、「輪廻の輪から抜け出す」というような到達目標は見られない。例えば一七七九年「水の上の霊らの歌」(Gesang der Geister über den Wasern)という詩の中で人間の魂を水の循環の比喩を使い、生々流転が永遠に続くという考えを表現している。<sup>(18)</sup>また、一八二九年九月一日、最晩年のゲーテはエッカーマンとの対話の際に、霊魂不滅と生命の永遠性への信仰を述べている。彼は、霊魂不滅について論じるためにエンテレヒーという、アリストテレスの哲学的概念を使って、現世で偉大なエンテレヒーでなければ、来世でも偉大なエンテレヒーになることができない<sup>(19)</sup>と述べてエンテレヒー、すなわち霊魂は常に生まれ変わるが、来世の存在の大きさは今世の活躍による、という輪廻観を示した。これはヒンズー教の良い行動によって良い存在として生まれ変わる、という輪廻思想に似ている。

### 三 「パーリア」における輪廻概念

ゲーテがヒンズー教社会について考察した成果は「神とバヤデレ——インド(伝説より)」(Der Gott und die Bajadere, 1797)と「パーリア」(Paria, 1824)という詩に見られる。パーリアとは、カースト制度の外側にあつて、ヒンズー教社会において不可触民として差別されてきた人々のことである。ゲーテはすでに一七七〇年代からダッペルの『アジア』を通してパーリアについて知っており、四〇年以上経った一八二〇年代にパーリアにつ

いて再研究を始めた。詩「パーリア」の執筆に際しては、ソネラの『旅』を基にした<sup>(21)</sup>。

三部作である「パーリア」は、「パーリアの祈り」(Des Paria Gebet)、「聖譚」(Legende)、「パーリアの感謝」(Dank des Paria)という三つの詩からなる。「パーリアの感謝」で「偉大な梵天よ いまこそ知ります(省略) あなたはすべてをうべなわれます／あなたは しもじもの者に対しても／耳をふさぐようなことはなさいませぬ／新生の恵みを与えて下さいました<sup>(22)</sup>」とある。この「新生の恵みを与えて下さいました」は、ドイツ語で「Alle hast du neu geboren」<sup>(23)</sup>であり、「皆を蘇らせた」や「皆を生まれ変わらせた」などの和訳も考えられる。ここでパーリアは自分たちを「しもじもの者」と称して、この我ら「しもじもの者」に、梵天は新しい人生を与えてくれたと言っているが、どの階級に生まれ変わったかは描かれていない。しかし「パーリアの祈り」では、パーリアは梵天に次のように祈っている、「主よ さてもまたこの祈りの後には／私にも子としての祝福をお与えください／それとも 私ごときもあなたに結ばれる／しるしを お現わし下さいませよう／あの遊女さえとりあげて／女神の地位にたかめられたお方なら／わたしどもにも御名をあがめるべく／かような奇跡をもたらしたまえ<sup>(24)</sup>」とあることから、おそらくパーリアは今より高い階級に生まれ変わることから、つまりパーリアは、詩「神とバヤデレ——インド(伝説より)」に出てくるバヤデレ(遊女)のように、自分も神化したいと願

っているのである。ただしバヤデレは来世ではなく、今世において神化した、「新生の恵みを与えて下さいました」という句は、来世のことを意味していると考えられるゆえに、ゲートはヒンズー教の輪廻観を意識し、この詩を書いた。

#### 四 『ヴァイルヘルム・マイスターの遍歴時代』

——「マカリーエ」の本質

『アルジュナ』では、アルジュナがインドラの天界へ行き、そこで地球から星のように見えていた亡くなった人々の魂と出会う場面がある。このような宇宙規模の輪廻観は、ゲートの小説『ヴァイルヘルム・マイスターの遍歴時代』(Wilhelm Meisters Wanderjahre 以下『ヴァイルヘルム』と略す、一八二九年)の中にも見られる。小説の登場人物マカリーエの内面には宇宙が存在している、よって彼女は宇宙の活動に参加することができるとあり、また主人公ヴァイルヘルムは、彼女が星になる夢を見ている。マカリーエの本質に関して西洋思想に基づいた研究は行われてきたが、ヒンズー教の思想に基づいた解釈はまだない。『アルジュナ』のアルジュナが天界へ行き、そこで地球から星のように見えていた、亡くなった人々の魂と出会う場面が、『ヴァイルヘルム』のある場面と似ているので、以下でこれらを比較する。

まずマカリーエの座っている椅子と、アルジュナの乗っている戦車が似ている。「マカリーエさんの座るいすが、まるで生

き物みたいにひとりでこっちへ動いてくるんです。いすは金色に輝<sup>(26)</sup>いている、とある。『アルジュナ』では「太陽のように照らしつつ、神聖な戦車に乗った<sup>(27)</sup>」とある。その後アルジュナは戦車に乗り続けるが、マカリーエは雲に運ばれ天に昇る。

次にマカリーエが星に変身する様と、『アルジュナ』で人々が星になる様が似ている。ヴァイルヘルムが自身の夢について「最後に彼女(マカリーエ)の美しい顔の代わりに、散りゆく雲のあいだに、星がひとつまたたくが見えました<sup>(28)</sup>」と言っている。マカリーエは星になり空に上がったが、彼はそれを星と見た。『アルジュナ』では「彼(アルジュナ)は地上を動く人間たちに見えない道を進み、驚嘆すべき天車を幾千と見た。ここでは太陽も月も火も輝いていなかったが、それらは功德で得たそれら自身の輝きで輝いていた<sup>(29)</sup>」とあり、御者のマターリが、アルジュナに「これは善行を積んだ人々がそれぞれの場所に位置しているものです。地上では、あなたは彼らを星であると見ていたのです<sup>(30)</sup>」と説明している。善行を積んで亡くなった人々の魂は、天界のそれぞれの場所に位置して輝き、地球から星のように見える。以上からゲートは『アルジュナ』の「偉大な人間が星になる」という概念を『ヴァイルヘルム』に用いたと言える。引き続き同じ場面で、『ヴァイルヘルム』は、夢の中でマカリーエが星になるのを見て、「その星はたえず上へとはこはれて、(中略)その星は星空全体とひとつに溶けあってしまったんです<sup>(31)</sup>」と言っている。ヴァイルヘルムが目覚めると「明けの明星」が窓

から見えた。「そうして、目をやればこんどは——明けの明星が、あの星と同じように美しく、もっとも、光り輝く壮麗さはあの星ほどではないかもしれませんが、じつさいに目に光っているではありませんか。あなたに浮かぶ現実の星が夢に見た星の代わりとなって、幻の星のおびていた壮麗さを吸い取っているのです」と。この夢の話を聞いた天文学者は「どうかこのことが、あの神々しい方（マカリーエ）の下界を離れる予兆ではないように！あの方（マカリーエ）はおそかれ早かれそういう神化にあずかる方です」と言った。ヴィルヘルムの夢と天文学者の言葉は、彼女は神化し、その魂はいつか星空で美しい星として輝き続ける、という彼女の未来を予言したと言える。

『アルジュナ』では、人々の魂は、亡くなった後に輝くが、マカリーエは「小さいころから自分の内なる自我が、幾多の輝く存在に満たされ、何ものにもまして明るい太陽の光でさえ曇らせることのできないひとつの光によって照らされていたのを思い出す<sup>34</sup>」と言い、生きている間に輝きを放った。

ファルクとの対話からわかるように、人間の魂は人間としてだけではなく、星としてまたは世界として生まれ変わることもある、とゲーテは考えた。そして彼は、マカリーエの魂は亡くなってからも輝き続ける、と述べている。つまり彼は、『アルジュナ』の地球から星に見える、亡くなった人々の輝く魂を、大きなモナドとして読み取ったのである。ヒンズー教の輪廻概念を通し、ゲーテは自身の輪廻概念を深化させたと考える。

## 五 『ファウスト』第二部

——「ホムンクルス」の本質

ゲーテ最晩年の作品である『ファウスト』第二部（一八三二年）の中にもヒンズー教思想があると考えられる。前記の亡くなった人々の魂が星のように輝く、という事象は『ファウスト』第二部に登場する「ホムンクルス」という存在にも少し見られる。『ファウスト』第一部で、ファウストの助手であったワーグナーが、第二部では一代の碩学と言われる身となって、人造人間ホムンクルスを生み出す。ホムンクルスとはラテン語で人間の意で、男性の精子を密閉したレトルトに入れておくと、それが生氣を得て動き、肉体はなく透明であるが、驚歎すべき神秘的な知恵があり、妖精のごとく力強く活動するもの、とされている。神秘家などの雑記からゲーテはこの着想を得、それをより発展させたと考えられる。

『ファウスト』第二部第二幕で、気を失っているファウストを尻目に、メフィストフェレスは実験室へ行き、そこではワーグナーがホムンクルスの創造を試みている。そしてついにレトルトの中に肉体を持たない純粹生命体ホムンクルスが産まれる。ホムンクルスは、その神通力によって失神しているファウストの夢を読み取り、自らも人生を体験したいと思いい立ち、ワーグナーの元を離れてファウストに随行することにする。ここでホムンクルスが「光を発する」ことに注目したい。「輝く

ビー」、「稲妻のような光を発する」、「明るい白い光」、「光っているな」、「私が先立ちして照らしましょう」、「光はたくさんだしますが」などの表現から、ホムンクルスは光る力、能力を持っているとわかる。<sup>(36)</sup> まだ肉体がないホムンクルスは魂のようなものであり、その魂は肉体化される前から存在し、光を発することができる。ワグナーがホムンクルスを作っている最中にメフィストフェレスに「おいでなさい。よい星回りです」と話しかけているが、この箇所はドイツ語の原本で「Wilkommen! zu dem Stern der Stunde」<sup>(38)</sup> という。ここではドイツ語で頻繁に使われる比喩「Stensunde」（記念すべき歴史的な時）という表現を「zu dem Stern der Stunde」という文書に言い換えて用いている。「Wilkommen zu dem Stern der Stunde」を言葉通りに訳すと「この時間に誕生する（した）星へようこそ！」になる。ここで誕生する星とはホムンクルスである。つまりこの透明な「魂」の誕生が「星」の誕生に譬えられているのである。この言葉は二つの意味で読むことができる。一つはこの時に起こった大きな出来事として、もう一つは、このホムンクルスの輝き、光自体として、である。「ファウスト」第二部「中世風の実験室」の章の中で、作られたばかりのホムンクルスは、メフィストフェレスに「私が先立ちして照らしましょう」と述べて、このあとの旅の際に、ファウストとメフィストフェレスの道を照らす役割を果たしている。これは、『ファウスト』第一部「ワルプルギスの夜」の章に出てくる道案内

役の「鬼火」に似ている。<sup>(39)</sup> このことからゲーテにとって光っているものは、周りを照らし導く役割を持っていると言える。

## 六 輝く魂

『ギーター』第四章の中で、「この身体の、一切の門において、知識という光明が生ずる時、純質が増大したと知るべきである」とある。ここでの「一切の門」は眼、耳などの感覚器官を指している。そして「暗質は無知から生じ<sup>(40)</sup>」とあるが、これは、知識という光明の反対を表している。『ギーター』では、光明は知識と同等とされ、暗質は無知と同等とされている。このような考え方は、知人ヴィーラントに対する言葉やゲーテが描いたマカリーエやホムンクルスにも見られる。ヴィーラントとマカリーエは、二人とも来世以降、輝く星になるとゲーテは述べている。ゲーテはヴィーラントを、知恵のある大切な友人として先輩として尊敬していた。マカリーエは不思議な予言能力を持っており、宇宙の偉大さに目覚めた存在である。

上述のようにヴィーラントはいつか輝く星となる、とゲーテに想像され、マカリーエとホムンクルスは、物語の中で実際に輝いた。ヴィーラントとマカリーエは、人間として善の力を持っており、またマカリーエとホムンクルスは神秘的な力を持っており、ホムンクルスの場合、光は道案内、つまり周りを照らす役である。

魂（星）が光を放って輝く条件は「善行を積むこと」である

とゲーテは考えた。これは『ギーター』の、光明は知識と同等とされ、暗質は無知と同等とされる、という考えより一歩進んでおり、『アルジュナ』の善行を積んだ人々の魂が輝く、という事象に似ている。ゲーテは、『アルジュナ』を参考に、知識だけではなくむしろ人間として善をなすことを主眼にした可能性が高い。

### おわりに

以上、ゲーテはすでに青年期から輪廻観を持っていたが、ヒンズー教の思想とその輪廻概念に出会ったことにより、特に晩年の詩や小説の登場人物をより思い通り描くことができた、と結論づけることができる。しかしながらそれにもかかわらず、ゲーテの輪廻観とヒンズー教の輪廻観は少し異なる。ゲーテの場合、ヒンズー教の「輪廻の輪から抜け出す」というような到達目標は見られない。彼にとつての霊魂は、常に輪廻し続けるものである。彼がヒンズー教の思想、特に輪廻概念から影響を受けた判断できる著作及び人物は、詩「パリア」、『ヴィルヘルム』の「マカリーエ」、『ファウスト』第二部の「ホームクルス」である。詩「パリア」で梵天への祈りによってパリアの者を生まれ変わらせた、という部分は、ゲーテが当時の文献からヒンズー教についての知見を得ていたゆえに書くことができた、と考えられる。「パリア」は一八二四年に執筆されたので、ゲーテはそれまでにヒンズー教の輪廻観について学んだ

に違いない。『ヴィルヘルム』と『ファウスト』第二部を執筆した時点で、彼は『ギーター』の全訳と『アルジュナ』をすでに読んでいた。『アルジュナ』の中の、善行を積んで亡くなった人々の魂は、「功德で得たそれら自身の輝きで」光っていた、という部分からゲーテは以前から持っていた「人間が星になる」という考えをさらに深め、特に「マカリーエ」、「ホームクルス」により表現したと言える。ただしゲーテが影響を受けた西洋の霊魂概念では、靈魂の輝きについて説明できないゆえに、その考えは、主にヒンズー教から取ってきたものと言える。ヒンズー教の輪廻概念と関連する行為の概念がゲーテの作品で現れているかどうか、については今後の研究課題とする。

- (1) Helmut Obst, *Reinkarnation, Weltgeschichte einer Idee*, München, Verlag C.H. Beck, 2009, pp. 134-139.
- (2) Gloria Colombo, Goethe und die Seelenwanderung, *Goethe-Jahrbuch 2012*, vol. 129, Göttingen: Wallstein Verlag, 2013, pp. 30-47.
- (3) ックラッゲン、エヴェリン「ゲーテにおける『生命哲学』の研究——自然詩文・永遠・輪廻・行為——」『創価大学・創価女子短期大学学術機関リポジトリ』二〇一七年。http://hdl.handle.net/10911/4983二〇一八年九月一五日アクセス。
- (4) Colombo, *op. cit.*, p. 47. 筆者訳。
- (5) Vishva Adhuri and Joydeep Bagchee, *The Nay Science, A History of German Indology*, New York: Oxford University Press, 2014, pp. 30-48.
- (6) Johann Wolfgang Goethe, *Briefe, Tagebücher und Gespräche. 1805-1811*, Sämtliche Werke, vol. 6 (33), Ed. Rose Ureienberger, Frankfurt: Deutscher Klassiker Verlag, 1993, p. 300, 307, 315, 321, 326.
- (7) Elise von Kündell, *Goethe als Benutzer der Weimarer Bibliothek*,

- Weimar, 1931, [Ann. 3], Nr. 956.
- (∞) Hans Ruppert, *Goethes Bibliothek, Katalog*. Weimar: Arion Verlag, 1958. [Ann. 12], Nr. 1784.
- (9) Johann Wolfgang Goethe, *Briefe, Tagebücher und Gespräche* 1823-1828, *Sämtliche Werke*, vol. 10 (37), Eds. Horst Fiebig et al., Frankfurt: Deutscher Klassiker Verlag, 1993, p. 1000 参照。
- (10) Johann Wolfgang Goethe, *Werke*, Ed. in order of Großherzogin Sophie von Sachsen, vol. 3, Weimar: 1887-1919, p. 260.
- (11) Olfert Dapper, *Asia*, Nürnberg: Froberg für Hofmann, 1681. Pierre Sonnerat, *Reise nach Ostindien und China auf Befehl des Königs unternommen vom Jahr 1774 bis 1781*, Zürich: Orell, Gebner, Fußli und Kompagnie, 1783. Johann Gottfried Herder, *Ideen zur Philosophie der Geschichte der Menschheit*, Werke, vol. 6, Ed. Martin Bollacher, Frankfurt: Deutscher Klassiker Verlag, 1989.
- (12) ックラッゲン、前掲論文、一四二頁。
- (13) エッカーマン『ゲーテとの対話(中)』山下肇訳、岩波書店、二〇〇一年、三三七―三三八頁参照。
- (14) ビーターマン編『ゲーテ対話録2』菊池栄一訳、白水社、一九六三年、二〇七―二二三頁。
- (15) 『バガヴァッド・ギーター』鏗淳訳、講談社、二〇〇八年、二三四頁。
- (16) Veerawamy Krishnara, *The Bhagavad-Gita: Translation and Commentary*, Lincoln: Writers Club Press, 2002, p. 146 参照。
- (17) 『バガヴァッド・ギーター』上村勝彦訳、岩波文庫、一九九二年、七七頁。
- (18) ゲーテ『詩集』山口四郎訳その他『ゲーテ全集1』潮出版社、一九七九年、二二二頁。
- (19) エッカーマン、前掲書、一三六―一三七頁。
- (20) 『ゲーテ全集1』では詩のタイトルに「娼婦」が使われているが、「バヤデレ」の方が原意に近いため筆者が言葉を入れ替えた。
- (21) Johann Wolfgang Goethe, *Geistliche, 1800-1832*, *Sämtliche Werke*, vol. 2, Ed. Karl Eibl, Frankfurt: Deutscher Klassiker Verlag, 1988, p. 1045.
- (22) 『ゲーテ全集1』二九七頁。
- (23) Johann Wolfgang Goethe, *Gedichte, 1800-1832*, p. 455.
- (24) 『ゲーテ全集1』二九七頁。
- (25) Rudolf Steiner, *Das Wesen des Egoismus*, Goethes Wilhelm Meister, Berlin, 1909. <http://anthroposophie.byu.edu> 二〇一八年九月一五日アクセス。Klaudia Hilgers, *Entelechie, Monade und Metamorphose*, München: Wilhelm Fink Verlag, 2002.
- (26) 『ゲーテ全集8』潮出版社、一九八一年、一〇三頁。
- (27) 『原典訳マハーバーラタ3』上村勝彦訳、ちくま学芸文庫、二〇〇二年、二二四頁。
- (28) 『ゲーテ全集8』一〇三頁。
- (29) 『原典訳マハーバーラタ3』一二四頁。
- (30) 同書、一二四頁。
- (31) 『ゲーテ全集8』一〇三―一〇四頁。
- (32) 同書、一〇四頁。
- (33) 同書、一〇四頁。
- (34) 同書、三八七頁。
- (35) ゲーテ『ファウスト2』相良守峰訳、岩波文庫、一九五八年、五一頁参照。
- (36) 同書、一五〇―一五一頁、一五二頁、一六二頁、二四三頁参照。
- (37) 同書、一五〇―一五一頁。
- (38) Johann Wolfgang Goethe, *Faust. Der Tragödie Zweiter Teil*, Stuttgart: Philipp Reclam, 2001, p. 66.
- (39) ゲーテ『ファウスト1』相良守峰訳、岩波文庫、一九五八年、二七四―二七八頁参照。
- (40) 『バガヴァッド・ギーター』一九九二年、一一四頁。

(Zrnaggen Evelyn) ゲーテの輪廻観、創価大学助教)